

5/15/2011

私たちには、羊飼いを見る機会はほとんどありませんが、聖書の時代には羊飼いはいたるところで見られたようです。羊飼いの目的は一重に羊を守ることにありました。しかし多くの羊飼いは狼の群れを目にすると、羊を置いたまま逃げてしまったそうです。

しかし良い羊飼いは違いました。イエスの言葉に聞いてみましょう。「良い羊飼いは羊のために命を捨てる。」狼の群れに襲われた羊を、良い羊飼いは自分の身体を盾にして守り通すと言うのです。そしてイエスは言われました。「わたしは良い羊飼いである。」

良い羊飼いが守る羊とは誰のことでしょうか。イエスが癒した病人がそれです。イエスが歩けるようにした足のなえた男がそれです。イエスが悪霊から解放した精神を病んだ女性がそれです。イエスが元気づけ、味方した貧しい人々や女性達がそれです。彼らはすべて、イエスと出会うことによって、自分は神にこよなく愛されている、誰も取って代わることのできない、宇宙で唯一の、人格的存在だという真実に目覚めた人々です。現代の言葉で言えば、羊とは不正義の被害者です。

それでは狼とは誰のことでしょうか。狼とは、イエスが力の限り愛した人々を、神に呪われた存在として軽蔑し、差別し、足蹴にした人たちのことです。

具体的には、イエスの活動を妨害したパリサイ派の人たち、イエスを十字架につけようとひそかに計画を巡らした祭司長、律法学者達です。現代の言葉で言えば、狼は羊を危険な目に遭わせる加害者のことです。

さて、私たちは羊でしょうか。それとも狼でしょうか。

その答えは、両方、つまり私たちは羊でもあり、狼でもあるということではないでしょうか。

先週のニューヨークタイムズに次のような胸がふさがるような悲しい記事が載っていました。4才の女の子がブロンクスのアパートで死体で発見されました。体重わずか18ポンドでした。母親とそのボーイフレンド、そして祖母が逮捕されました。

死亡の原因は、彼らが お腹が空いたと言って泣く幼子をベッドに縛り付けて、ほったらかしにしていたからです。死因は餓死でした。

幼子の母親とボーイフレンド、そして祖母は少数民族に属し、貧しく、教育もなく、社会から差別されていた人々です。その意味では、彼らは被害者であり、‘イエスの言う羊’です。しかし、餓死した幼子の側から見れば、彼らは加害者であり、狼です。

この例が示すように、私たち人間は、ほとんどの場合、羊だけ、狼だけ、というのではなく、羊であり、同時に狼であるというのが本当のところだと思います。

私たちは、到底承服できないアンフェアな批判を受けることがあります。その時私たちは被害者であり、羊です。しかし、その私たちも、腹立ちまぎれにその人たちに一方的でアンフェアな批判を投げかけます。その瞬間に私たちは、被害者から加害者になり、羊から狼へと逆転するのです。私たちが羊でもあり、同時に狼だということは否定できない事実です。

良い羊飼いであるイエスは、羊であり、狼である私たち、つまり、被害者でありながら加害者でもある私たちと、どのように向き合われるのでしょうか。

イエスは私たちが狼である時は、狼が必要なものを、羊である時は、羊が必要なものをお与えになるのです。

私たちが加害者である時、イエスは私たちの内に潜む傲慢や残酷さ、思慮の足りなさを赤裸裸に暴き出されます。加害者である私たちはこのイエスの辛辣さ、厳しさを必要としているからです。イエスが律法学者達へ厳しい言葉を投げかけた理由がここにあります。『あなたがたは偽善者だ。あなたがたは不遜だ。』

私たちが羊である場合、イエスの愛は無限なる優しさという姿を取って私たちを慰め、私たちを支えてくれます。

イエスの愛は、このように厳しさと優しさの両面を持っているのです。優しさに裏打ちされない厳しさは、陰しさになってしまいます。厳しさに裏打ちされない優しさは甘さになってしまいます。

それはともあれ、イエスは私たちが必要なものを常にお与えになります。イエスの愛に終わるところはありません

あの不幸な幼子が必要としているもの、それは永遠の命です。イエスはそれを与えておられます。彼女の死に責任のある3人の大人達が必要としているもの、それは悔い改めです。イエスは悔い改めのチャンスに良心の呵責という形で与えられています。良心の呵責も神の愛の現れです。イエスは幼子を、そして幼子を死に追いやった大人達を、こよなく愛しておられるのです。

良い羊飼いは、私たちが被害者である時も、つまり羊である時も、加害者である時も、つまり狼である時も、私たちが愛して止まないのです。

良き音信、福音とは正にこのことです。